



安珍は、とぼとぼと歩く・・・高揚していた気分が、いつべんに吹っ飛んでしまった。
忘れていた・・・いや、忘れようとしていた・・・清姫の身体の感触が、よみがえってきている・・・。

おれは・・・おれのこの身体は・・・姫の身体を求めている・・・。

このまま、真砂の郷にいけば・・・おれは、間違いなく、今度こそ、姫を抱いてしまう・・・。

姫の幼すぎる肢体を・・・おれは、自分の性欲を処理するための道具として使ってしまうだろう・・・。

神聖な・・・あの少女を、そんな汚れた目的のために陥れてしまってよいのか？